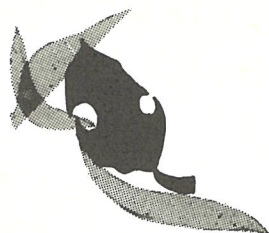


随想



京、島原の今昔

ちこう 知公登紀子

(株式会社三昇堂小倉取締役専務)
'70年高等学校卒業

島原は京都に於ける最も古い公許の遊里で、江戸の吉原は全ての施設や街並み、街の名前まで島原を模して作られたといわれている。

はじめは中京区柳馬場二条にあつて、二条柳町＝柳の廓と呼ばれていたが、京都御所に近か

つた事と、豊臣から徳川政権への交替が明らかになり二条城の建設が始められ二条通は大手筋の役割を果たすようになったことから幕府公認の遊里を残すことは徳川氏の政策上不適合となり、一六〇二(慶長七)年に下京区六条室町に移された。「六条柳町」、「六条三筋町」ともいわれた移転先の遊廓は繁栄し、しだいに大規模なものになり諸国にも名を知られていくようになる。有名な吉野太夫はこの三筋町時代の遊女で灰屋紹益との結婚話は今なお語り継がれている。都市化が進むにつれ、周辺に

一般人が生活するようになると風儀上好ましくないという問題が生じ、一六四〇(寛永十七)年に現在の地(下京区西新屋敷)に三転する事になる。

当時の島原は葛野郡朱雀野村と呼ばれた原野に近い場所だったらしいが突然の移転で廓中が大混乱になり、飯家を建て幕を張つて雨露をしのいだ光景などが、先年肥前の国(長崎県)で起きた島原の乱と類似し、また外界と遮断された構造が島原城と似ていたこともあいまって「島原」と呼ばれるようになったという。

以後、公認歓楽街として栄えていき、お茶屋を中心に小間物屋、紙屋、八百屋など様々な店が軒を連ね、十七世紀末の元禄の頃までおおいに発展した。一七六一(宝暦十一)年洛中洛外茶屋惣年寄という特権を与えられ市中の各所に出現する新地(祇園、上七軒など)を配下にしようにとする公認の傾城町(遊廓)

としての権威にすがっていくようになる。

その中で「角屋」は揚屋(太夫や芸妓などを一切かかえず、置屋から太夫などと呼んで宴会を催す場)を継承し、今でいう高級料亭としての地位を築いていく。従つて明治以降の公娼制度の下で遊所特定地を意味する「遊廓」とは本質を異にし、名流貴顕の人々が集まるサロンとして揚屋文化の伝統を守り通していく事になる。江戸から島原に安住した炭太祇や与謝蕪村らを中心に俳諧を嗜む風流人を輩出し、島原俳壇と称されるものが形成されたりもする。

島原が歴史に名を留めるようになったのは幕末期になつてからである。西郷隆盛や久坂玄瑞など薩長土肥の勤王志士が軍用金調達のために当時の豪商を招き、会談をした事や、その勤王志士を捜し求めて新撰組が闊歩した事により明治維新胎動の地として一役を担つたからである。

その後、明治三十年頃の島原

は新制度による娼妓屋を中心とする「遊廊」となり昭和三十三年の売春防止法の施行まで存続する事になる。

現在の島原はかつてのお茶屋や娼妓屋などが廃業し、その地にマンションや駐車場が建設されている。花街の象徴でもあった歌舞練場も取り壊されてしまい、今となっては街並みが保存されていない事が残念である。

その中で揚屋であった「角屋」と置屋であった「輪違屋」は今なお現存し「角屋」は「角屋もてなしの文化美術館」として見学が可能であり、「輪違屋」は太夫を有する置屋として内外の文化人にひとときのタイムスリップを楽しませてくれる社交の場となっている。そして花屋町通りに面して建っている「島原大門」は切妻作り、本瓦葺の高麗門で、遊里に不似合いな厳めしさで今もその姿を留め、時折訪れる観光客の格好のカメラスポットとなっている。

ットとなっている。

江戸中期に於ける 天文暦学通信教育 が語るメッセーヂ

川和田晶子

(同志社大学大学院文学研究科
文化史学専攻後期課程)

人生には不思議な巡り合わせがあつて、その力が人の運命をある方向へ強く牽引することがある。江戸中期に活躍した土佐藩の学者・谷泰山の残した書簡との出会いが、私の場合、明治維新时期までの日本天文暦学史を本格的に研究する、最初の大きな契機になった。

一六八四年に貞享改暦を達成した天文学者・澁川春海と彼の事績の研究を始め、日本学士院、国立東京天文台等に残る一次文献を私は過去に調査した。しか

し先行研究を越える発見はなく、既知の限られた史料から、江戸中期の社会が必要とした天文暦学と学者の研究活動の意義を再構成すること、そして暦学が多様な宗教的要素・陰陽道を包括する歴史を認識しながら、科学史分野で適切に評価する困難に直面して、研究は行き詰まっていた。そんな時、澁川春海の高弟の一人で十八世紀前半を代表する儒学者・谷泰山の残した直筆書簡が高知県立図書館に存在することを知り、一九九五年に私は初めて現地調査を試みた。

一六九四年、泰山は三十二歳の時に土佐に居住しながら、幕府天文方役人として江戸で活躍する五十六歳の春海に入門、通信形式で天文暦学を学び、一七〇二年に免許皆伝した。彼は春海と交わした通信書簡を編集、タイトルを付した冊子と巻子を作り、天文暦学の講義録を三十冊ほど残した。これらは通信教

育の開始から修了まで、春海が筆示した教授内容を記している。それらに拠れば、泰山は貞享暦法の数理、渾天儀や簡儀など天文測量儀器的扱い方等、専門技術を修得した。同時進行で、主要国史文献に現れる暦日干支を検証して、日本史を年代学的に正確に把握する学習を行い、暦日と関係する陰陽道祭祀等、東アジア文化圏の伝統的天文暦学を体系的に修めた事実が分かっていた。そして通信講義の最終段階で、日月食の起こる日時と欠けの割合を算定する、暦算の奥義を理解するに至った。

書面上だけで天文暦学の講義が八年間続いた。二人はそれぞれの居住地で弟子に講義を行う日常生活を送りつつ、学習に集中した時期には一日に二、三通の書簡を双方ともが書き送った。泰山は文面に学習課題の事項を要領よく記し、春海は彼の主張に対し短くても必ずコメントし、質問には的確な応答を朱

書して返信した。実は生前に二人の対面が実現したのは、免許皆伝後に秦山が上京した一七〇四年の一カ月間のみだった。この面授では、春海の役宅観測台での天文観測実習の他に、国家占星術の作法・天文密奏の極秘口伝が行われた。

春海の教授方法には学ぶべき点が多い。筆授ではきめ細かく学問上の指摘を行い、私信書簡を分けて、弟子とのコミュニケーションを深めている。そして面授では対面しなければ伝わらない事項を教えている。弟子は面授を受けて、先生が持つ知識の奥深さを実感して学問への関心を更に深めることになる。秦山は返信内容を再読し、煩雑な手間を惜しまず何冊も講義録を編集した理由について、記録を保存したい本人の意欲だけでなく、春海の教授に弟子を惹き付ける要素を認めることができた。

マイクロフィルム化されている

ない原史料を写真撮影して、現像したテキストを一字ずつ読み解くことは根気と集中力が必要な作業である。三百年前の天文暦学調査の目的以外に、直筆書簡に現れる、時間を越えて伝わる心の交流のドラマを知ることには私はすっかり魅了された。かくて私は一九九五年以降、天文暦学史の古典籍稿本や書簡を翻刻するために、全国各地の図書館や資料館を調査する日々を送り、現在に至っている。

サッカーへの期待

松本行弘

(朝日新聞運動部)

’88年大学法学部政治学科卒業

サッカーに期待している。二年ほど前からサッカー取材の担当となったから、ではない。恨みを晴らすきっかけを与えてくれそうだからだ。

恨み、などと物騒な言葉を使って申し訳ない。それほど強い思いなのだと理解してほしい。話は少年時代にさかのぼる。

東海地方のひなびた山村で小中学生時代を過ごした。スポーツが好きで、何とか関わりたいたと、スポーツ記者になったのだが、その芽は当時からもうあった。あこがれはプロ野球選手。しかし、中学で野球に打ち込むことはできなかった。学校に野球部がなかったからだ。過疎のため、同級生は二十数人という超小規模校だった。最低九人も必要な野球部の活動は無理と説明を受けた。選択肢は剣道と軟式テニスだけ。仕方なく三年間、竹刀を振った。その時点でプロ野球選手になる夢はあきらめた。

資質の問題もあるから、野球をしていたらプロになった、とまではさすがに言わない。しかし、やりたい競技を思う存分楽しめる環境があったら、その後

のスポーツライフもかなり変わっていたのでは、もっと充実していたかも、という悔しさがある。貧弱な環境を恨んでしまおう。そこでサッカーだ。

一九九三年、Jリーグが開幕し、爆発的なサッカーブームが巻き起こった。ブラジル帰りのカズがゴールのたびにダンスを踊る姿は、プロ野球や大相撲といった既存のプロスポーツとは異質の雰囲気。新しい娯楽の誕生だった。見た目以上に、特に有識者から注目されたのは、その理念だ。

学校や会社単位でなく、地域に根ざしたスポーツクラブを作ろう。そうした理念をゆつくり国内に広めて定着させようというJリーグの「百年構想」。こんなスポーツクラブが自分の田舎にあつたら、選択の幅が広がっていただろう。過疎地であっても、高校生や大人と交じって、野球どころか十一人のサッカーだって、十五人のラグビーだつ

て、できた。中学生の自分には残念ながら、そんなクラブを作ろうという発想はなかった。

Jリーグ以前にも、そんなスポーツクラブを作る試みはあった。例えば、神戸製鋼ラグビー部。会社の傘の下で、というのでなく、言い方は悪いが、会社を利用して自分たちの気に入ったクラブを作ろう、という雰囲気を感じられた。その主体的な姿勢がモチベーションにつながり、有望な新人が集まり、強さに結びついた部分もあるだろう。しかし、それでも企業スポーツの枠の中では、限界があった。「神鋼に入社しないと、ボクらのラグビーができないのですわ」。ある部員が残念がっていたのを聞いたことがある。

実際、Jリーグだってまだ、親会社におんぶにだっこというチームもあり、理想が現実となるには本当に「百年」が必要なのかもしれない。文部省が総合型地域スポーツクラブの振興策

に力を入れているが、こういうのは下からの盛り上がりがないとなかなかうまくいかない。

サッカーの人氣もすっかり落ち着いたが、日本代表や欧州に進出した選手の活躍で、日本が韓国と共催する二〇〇二年ワールドカップまでは注目を集め続けるだろう。理念を背負ったサッカーには頑張ってもらいたい。「スポーツクラブを作ろうよ」「スポーツクラブで楽しもうよ」とささやき続けてほしい。サッカーからほかの競技へ、Jリーグのチームがあるような大きな街から山村まで、伝わることを期待している。

教壇に立つにあたって

馬場圭太

(女子大学現代社会学部助教授)

サバイバルの書としてビジネスマンに読まれていると言われ

る「風姿花傳」だが、この書には大学教員に教育について考えるきっかけを与える指摘がいくつも含まれている。ここで採りあげたいのは、問答條々に展開されている一節である。「申樂」を「講義」に置き換えて「解釈」してみるとどうなるだろうか：

〔問〕——講義するにあたって、当日教室の学生の様子をうかがうことにはどのような意味があるのでしょうか。

〔答〕——これはとても大事なことです。その日の教室の様子を眺めれば、講義がうまくいくかいかないか大体判断できます。

——学生が教室に集まっていってもざわついて集中できていないときがあります。そのようなときには、学生が教員の登壇をいまや遅しと待ちかねる状態まで待ち、その時を見計らって登壇し講義を始めれば、学生は教員に集中し講義はうまく進むでしょう。

——けれどもなかなかそうもいきません。講義は定刻に開始しなければならぬからです。そのようなときに場を静めるのはなかなか難しいことです。そのためには、いつもより身振り手振りを使い、声を大きくしたり、あるいはあちこち動き回ったりして、学生の目を引きつけるように生き生きと振る舞うとよいでしょう。

——夜の講義では雰囲気が全く異なります。たいてい湿っぽくなります。夜の講義はいったん湿っぽくなるとなかなか元に戻りません。ですから、夜の講義は初めが肝心です。きびきびと講義すべきです。

——要するに、陰と陽とが調和するところを見いだすことが肝心です。騒がしい時(陽)、これを静めようとする試みは陰にあたります。この試みは受講生が面白いと感じる心の元になります。これに対し、夜の講義では、きびきびと講義する。これは陰

に対して陽をもつてあたることです。そうでなければ、調和はあり得ず、調和しなければ成功もありえません。成功しなければ面白くありません。

——昼であつても時により場が陰気になることがあり、逆に夜であつても陽気になることがあります。当日教室の受講生の様子を見ることは、それを判断するために必要なのです。

この「解釈」は、ほとんど創作に近いが、原文にはこの「解釈」を受け入れる幅があるように思われる。この幅は、芸能と大学教育との間隔が非常に近いことを示唆している。ちまたで大学教員Ⅱエンターテイナー説なるものを耳にすることがある。これは、定義しただけでは誤解を与えかねない言説だが、世阿弥の申樂をイメージする限り、当たっていると言えそうである。

「問答」を読んで感ずるところ

は読者ごとに様々であろうが、ここで私がとくに汲み上げたいのは、テクニクの究極に控えている「面白さ」である。学生が講義を「面白い」と感じることでできるか否か、結局はそれが講義の善し惡しの分かれ目であり、テクニクはそれを引き出すための手段にすぎない。

「ウケ」る講義即ち「面白い」講義ではないことは経験則上すぐわかるが、それではどのような講義が本場に「面白い」と言えるのか。この問いに言語化された答えを与えることは難しいが、必ずしもその必要はない。受講生の顔色を見れば講義が「面白い」か否かは一目瞭然だからである。

ただ、講義には、芸能と決定的に違うところがある。講義では、内容の性格上、「面白さ」が受け手に対して即時には伝わりにくい嫌いがある。その場合には、面白くなくても受講生が講義に耐えうるだけの信頼関係を

教員の努力により構築するほかないであろう。「面白さ」が学生に伝わっているか常に不安にさらされている一年生教員にとつて、信頼関係を得るための作業は一次的には精神安定剤として機能している。しかし、講義をよりよいものにするためには不安の有無にかかわらず不可欠なことなのかもしれないと感じている。

どこまでも熱い 「フォーク」たち

一 湯山健一

(女子大学現代社会学部助教授)

一九九九年四月より一年間、在外研究の機会を与えて頂き、イングランド南部、イースト・サセックス州のルイスという小さな町で、民衆音楽の現状に関する調査を行って参りました。

到着早々、私は町のフォーク・クラブを訪ねるところから活動を始めました。

フォーク・クラブとは、通常週に一回、パブの一室に十八番の歌と楽器を携えて集い、古くから伝わる民衆の音楽を皆で楽しむ同好会のようなものです。ここに集う民衆音楽愛好家たちは「フォーク」と称され、主に四十代後半から六十代と、それ以上の年齢層で構成されています。伝統的な音楽を愛してやまないこれぐらいの世代となると顔ぶれはお察しの通り。私のような有色人種は、まるで見当たりません。実のところ、私がルイスのクラブに初めて顔を出したときの彼らの表情は、決して友好的なものではありませんでした。しかし、会話を交わし、少しずつうち解けて彼らの温かさに触れるにつけ、一度通じ合えば、ときにお節介なほど世話をやいてくれるのが彼らフォークなのだと思いは、日を

追う毎に深まるばかりでした。

ミレニウムを目前に控えたあの夜のこと、クラブで毎週顔を合わせているジョージがおもむろに、「日本にはいつ帰るんだい」と尋ねてきました。彼は、私が十年來追いつけている民謡歌手、ポップ・コパーとその家族たちの運転手を務めている人物で、それまでもギグ（小規模な演奏会）の予定などを逐一教えてくれていました。三月の末です」と答えると、「じゃあ三月二十二日テルスコウム村でのギグが最後になるな」と、ジョージ。「ただ、あれは村の組合主催だから切符が手に入るかどうか。でも行きたいだろう？ 少し探ってみるよ」。

そして当日。時間には充分余裕を見て家を出た私でしたが、何とこの日に限って暗がりの小さな標識を見落し、道に迷って、開始時間に少し遅れてしまいました。会場の前には、ジョージが待つていました。普段から愛想の良い方ではない彼のこの時の顔つきはいつも増して迫力を帯びていました。私が謝り始めるが早いかな、「家族はどうした。今日は家族同伴じゃないと入れないぞ。早く連れて来い」と、ジョージ。確かに切符にはそう記されていたのですが、私はそれまで家族を伴って夜のギグに出かけたことは殆どなかったため、自分には関係あるまいと思つていたのです。

ともあれ、彼に申し訳ないという気持ちもあり、またあの形相でこう言われては従わぬ訳にもいかず、私は、真つ暗な細い道を車で引き返し、二十分の後、妻と娘を乗せて村に戻りました。ジョージはまだ外で待つていました。今度は笑顔で迎えてくれた彼がドアを開いた瞬間、会場から大きな拍手が沸き起こりました。驚いて中を覗くと、五十人ほど集つた知己のフオーキーたちが皆立ち上がつてこちらを見ています。私はようやく気づきました。これがギグではなく、私たちのために開かれた、送別の宴なのだということに。

三カ月間、彼らは私に一言も告げることなく、たった一枚の「偽の」切符を作つて私に手渡し、この宴席の準備をしていたのでした。妻には大きな花束を、娘には大好きなイルカのぬいぐるみをと、私たちのテーブルは沢山のカードやプレゼントで一杯になりました。樽ごと持ち込んだビールに各々持ち寄つた数々の料理。私は涙をこらえることが出来ませんでした。御礼の挨拶をしなければと思ひながら涙が止まりません。暫くの間コパー家の面々が歌を唄つて場を繋いでくれました。数曲聴いてようやく落ち着きを取り戻した私は、立ち上がつてこう言いました。「みんなして僕を騙したんだな。何て奴らだ。みんな大嫌いだよ」。皆、大声をあげて笑つていました。本当に夢のようなひとときでした。

調査に際して、彼らが惜しみなく協力してくれたことは言うまでもありません。その上あのような素晴らしい席まで設けてくれ、何と御礼を言つたらよいのか分りません。あのときの切符は大切に額に入れて研究室に飾つてあります。どこまでも熱い彼らに、改めて心から感謝の言葉を述べて頂きたいと思ひます。「本当にありがとう」。

近頃元氣な日本映画

山崎敏昭

(高等学校教諭)

松竹の大船撮影所の売却を始め大手映画会社の先行きの不安は今年に入って一層募るが、いわゆるインディーズ系は結構元気がよい。『ワンダフルライフ』の是枝裕和、『M／OTHER』の諏訪敦彦、『双生児』の塚本晋也、『ニンゲン合格』などの黒沢清と若手監督作品は軒並み海外映画祭での評価も高く、派手さはないが各人の志の高さがこちよいものばかりだ。中でも、塩田明彦監督の『どこまでもいこう』の秀逸さは今最も注目している。

TVや新聞では「切れる十七歳」の引き起こす凶悪犯罪が話題にならない日はいくらいい

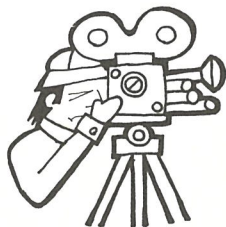
連日報道されている。そこには決まって「小学生の頃はいい子だったのに何故」という表現に出くわす。彼らにはいつたどんな小学生の生活があったのか。自分自身を振り返ってみても、虚無感やら高揚感やらもややといっぱい抱えていた高校時代に比べて、小学生時代は友だちと遊んでいた校庭やら海などの風景ばかりが思い浮かぶ。そこに何があったのかぼんやりと考えているときに、『どこまでもいこう』という映画に出会った。何ということもない普通の小学生の生活の描写にキラリと光るものがある不思議な七十五分の体験であった。

ヤクルトを盗んだり、仲間と連れもってケンカしたりとやりたい三昧の悪ガキ生活に明け暮れるアキラと光一の小学生生活。そんな中にも何か今までと違った風が吹いてくる。いつの間にか女の子は妙にグループ化して男仲間を冷たい眼差しで見

るようになり、遊んでいればお互いがわかりあえた二人の関係も微妙にすれ違いが生まれる。それが何なのかはわからない。そんなときにアキラは一人でたずみ、また歩き続ける。団地群の立ち並ぶ夕焼け、川の流れ、そしてロケット花火のはじける音や紙飛行機の飛んでいく様子。そこには親との会話も教師との学校生活もなく、大人以上に自分を見つめ、風景をぼんやり眺めている姿を同じ視線で観客はじつと眺めることになる。新しくできた友だちが死んでいったことに悲しみをどう表しているかわからないもどかしさ。そのときも観客はそつと彼の後ろ姿を眺めている。子ども時代の終わり、思春期の始まりをこんなふう描いた映画に出会うのは初めてで、実に新鮮な思いだ。

一口に少年を描くといっても様々である。『鉄塔武蔵野線』(九七年 長尾直樹監督)で鉄塔調

査に乗り出す少年の冒険物語を描いても、やはりかつての「養小説」と違って少年のかかえたもどかしさみたいなものがその基調にあり、「大人が思うほど子どもは単純じゃないぞ」とつきつけられる思いもする。今元氣な日本映画の新鋭作家に、こちらがさらにドキッとするような切り口で迫る映像を期待している。



frightened and curious of the foreigner in class, and chattering away in English, exchanging information they would never ask each other in Japanese.

Dogwood is a common name for several species of small trees in the genus *cornus*, of the dogwood family (Cornaceae). One of the better known species is the flowering dogwood (*cornus florida*), which grows naturally beneath taller trees in forests from southern Canada to Florida and west to Kansas and Oklahoma in the USA. It is a bushy tree with oval shaped leaves that are toothed and pointy at the tip, growing opposite each other on the stem. Cornaceae draw large quantities of water from the ground and if a branch is cut in the spring, water will drip from the cut. This is the source of the Japanese colloquial name for the tree, *hanamizuki*. It is also called 'America yamaboshi' because of its resemblance to the Japanese tree of that name. The colloquial English name supposedly came from the fact that certain skin diseases of dogs can be cured with the use of a brew made from the bark. The dogwood came originally to Japan in 1912 as a return gift for the cherry trees that were given to Washington, D.C. The original trees can be seen in Hibiya Park in Tokyo and since that time the tree has spread throughout Japan. This Kyotanabe friend appears to be a flowering *florida* dogwood, and harbors a little group of green and brown birds called the white eye.

When second term begins in late September and early October, the leaves on

the tree have changed from bright green to brilliant scarlet ; it is among the first to turn color in autumn and one of the most colorful-much more so than the maple to whose colors so many thousands flock in the fall weather. Students return to school refreshed but more mature from their summer adventures. The fall term brings the final work and test of endurance for us all. Leaves turn brown and drop to the ground. The clusters of fruit are bright red by November and easy for the birds to find in winter. Tests are written and graded. Winter snows may fall, but already the dogwood has prepared its blossoms for the following spring. It only awaits our attendance to begin again its flowery white display and the cycle of life and learning that it graces.



HANAMIZUKI : The Tree Outside My Classroom Window

Elizabeth HISER

(関西外国語大学助教授)

In April every year at Kyotanabe Campus we begin our classes in awe of the cherry blossoms and the chill of spring winds ; but, the tree that marks the onset of study and teaching for me is not cherry but dogwood. For a few years now I have been assigned and accepted with pleasure, a classroom in building TC-3 at the far end of the campus near the dining rooms. This room is on the second floor and looks into the hillside below the faculty cafeteria. It is a pleasant room on the shaded side of the building that remains cooler on average in both winter and summer. My year of language instruction begins with bare budding branches, dry hedges and heaps of dead leaves outside the window on the hill. These are not just below the window on the ground but immediately outside the window, as the slope begins on the first floor and rises quickly into full, pressing view filling the window with demanding immediacy on the second floor where we watch. It's a humble but impressive beginning full of promise just as my classes are.

Before the Golden Week break, the tree buds bursts into large white flat flowers of four to six petals with notched tips.

Some dogwood are red or pink but this one remembers and reflects the beauty of snow. There are no leaves as yet and the bright white blossoms seem all the more shocking because of the winter ground of grey and brown behind it on the hillside. For two or three weeks we enjoy the new brightness and know that more will come. The flowers are so close to the window that one can reach out and come within inches of touching them. They sway gently in the breeze and sparkle if the sun shines. It is still too cold to open the window much but the dazzling color is always there to refresh the eye. In the class, some take no notice of the display outside, and go about their studies, some sleep and miss everything, some daydream out the window and look through the flowers to their mind's distraction. The course has blossomed just as the tree ; students are beginning to work.

Once the blossoms have dropped petal by petal to the ground, the leaves show interest in opening. Bright, new green appears where the blossoms once spread in white. A little spring rain mixed with the warmth of sunshine hastens the opening of the leaves. The term is in full force now and there is no time to notice the large spined leaves drooping in the heat. The dogwood produces its buds for the following year's flowers in midsummer. The summer break brings midsummer flower buds at the tips of each twig. By the time the course reaches maturity, clusters of hard green fruit have also formed. Students are more confident with their course work, less